

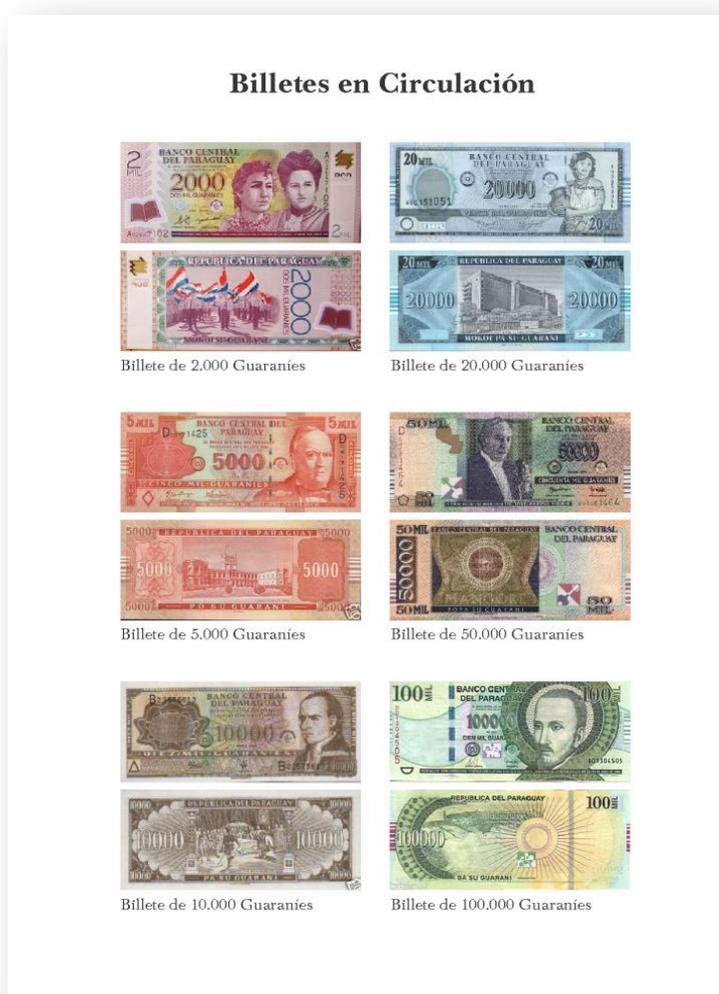
『 お札の図柄が語るパラグアイの歴史と文化 』

【1】はじめに

どの国でもお札はその国のシンボルです。そこに印刷されている図柄には国家や統治者が国民に伝えたいメッセージが込められており、さらには他国に知ってもらいたい国の象徴が表現されています。

多くは人物肖像で、その場合には君主や独立時の英雄・偉人が、さらに歴史の中で国家の存亡に直接関わった政治家、軍人など権力の中枢にいた人物が中心です。この辺りは固有名詞の違いを除けばどの国でも同じですが、一方、作家、芸術家、学者などの文化人のカテゴリーに入ると、それぞれの国の特徴が反映されてきます。(この正反対が多数加盟国の共通通貨であるユーロ紙幣で、人物だけでなく個別の国と分かる風景まで避けています。)

まずパラグアイの通貨単位ですが、右写真にあるようにGuaraní『グアラニ』で、これはもちろん先住民族「グアラニ族」に由来しています。パラグアイに来た入植者達は、1811年の独立以前から長く先住民族グアラニ族との混血をすすめ、



(パラグアイ紙幣。左上が最小額面 40 円程度で、右下が最大額面 2000 円程度。本稿では右上と右中の 2 枚を取り上げています)

その結果国民の大部分が混血(メスティソ)で構成されてきました。これは白人支配の社会構造を維持した他の中南米諸国と異なるパラグアイの特性であり、スペイン語とともにグアラニ語を公用語とするこの国で、通貨単位を『グアラニ』としたのもごく自然に思われます。

この『グアラニ』は 1944 年にペソから変更されて以来現在まで 70 年以上も、名称変更も、デノミもないまま継続して流通してきました。70 年前に 1 ドル=3.09 グアラニから始まった通貨も、現在は 1 ドル=5000 グアラニ前後(円換算では約 50 分の1)。したがって券面の数字が大きいのが難点ですが、ただこの長寿ぶりは、ハイパーインフレなど経済の混乱とともに通貨不安定の歴史を繰り返してきた中南米諸国ではもちろん、先進国を含む他の地域と比較しても特異な存在といえるでしょう。

このグアラニ紙幣の図柄から、この国の文化や歴史を示す人物肖像の2つを紹介します。一つは写真右上の2万グアラニ札(約 400 円)の女性肖像、でもう一つは写真右中の5万グアラニ札(約 1000 円)の男性肖像です。

【2】2万グアラニ札の女性肖像画 — “MUJER PARAGUAYA”(パラグアイ女性)



(旧紙幣のデザイン)



(新紙幣の両面で裏は中銀行舎)

これは特定個人ではなく象徴としての『パラグアイ女性』で、この背景を知るにはパラグアイの歴史をたどる必要があります。パラグアイの歴史の中で最も深刻で悲惨な事件は、亜・伯・ウルグアイ三カ国連合軍と戦った三国同盟戦争(1864-1870)での壊滅的な敗戦でした。この敗戦で国土の 4 分の 1、成年男子の8割程度を失なうという凄惨な結

果になりましたが、戦時中の物資供出から戦闘参加さらに戦後の復興のなかで、自己犠牲を払い人口の回復に寄与した『パラグアイ女性―“Mujer Paraguaya”』が、この大敗戦ゆえの国民的英雄として国の象徴とされるようになりました。これが2万グアラニ札のデザインに使用されている理由です。また戦時中の 1867 年に、宝飾品や資金を提供し祖国防衛に貢献すべく女性達がアスンシオンで集会をもった2月 24 日は「パラグアイ女性の日」と宣言されています。

お札の愛らしい女性肖像画の図案は 1950 年代に公募で選ばれたもので、モデルは当時の流行歌手ドラ・デル・セロ。新旧紙幣で若干の図柄の変更はありますが、水汲み女をモチーフにしたパラグアイ民謡ダンス「ラ・ガロペーラ」の衣装を纏っています。裾の広いスカート「パラ」、キャミソール「トゥポイ・ジェグア」、飾り櫛、耳飾り、花飾り、首にサンゴのロザリオ、という情緒あふれる民族衣装のいでたちです。

手に抱かれた水瓶には国旗の紋章が刻まれています。パラグアイ国旗は世界で唯一、表裏のある国旗(!)ですが、この水瓶の図柄は「表」の模様。独立の日に輝いていた繁栄の星をオリーブと椰子の葉が包んでいます。紙幣の額面数字の下にある2つの丸い文様が国旗の両面の図柄で、「裏」の紋章は『平和と正義』の文字の下に獅子と革命帽子が描かれています。



(パラグアイ国旗の「表」)



(国の紋章: 国旗の表裏の図柄で、左側の紋章が水瓶に刻まれている)

このように“パラグアイ女性”が救国の英雄で再建や復興の象徴であることは、隣国アルゼンチン出身のローマ法王フランシスコもご承知です。昨年2月にバチカンでの会見の際に、『三国同盟戦争で男1人に女8人という状況になったが、そこで祖国・言語・文化・信仰を守った“パラグアイ女性”にいつの日かノーベル平和賞が授与されることを望む』と述べています。フランシスコ法王は本年7月上旬にパラグアイに公式訪問する予定ですが、今当地では国を挙げての歓迎ムードが高まっています。

【3】5万グアラニ札の男性肖像画 — アグスティン・ピオ・バリオス・“マンガレ”



(紙幣表にはバリオスの肖像と国土が、裏には彼の通称“マンガレ”の名の刻まれたギターと楽譜が描かれている。)柄)



(右が伝統的な舞台衣装を纏ったマンガレ)

次に5万グアラニ札(約千円)の肖像ですが、この男性はクラシック・ギター界で世界的に著名な音楽家アグスティン・ピオ・バリオス(1885～1944)です。肖像画の下に小さな活字でこの本名が書かれていますが、音楽愛好家にはアグスティン・バリオス・“マンガレ”として知られており、裏の図柄のギターに大きく“MANGORE”と刻んであるのが分かります。また透かしの部分にも同じ彼の肖像と“マンガレ”の文字が入っているのが読み散れます。

紙幣裏のギターの真ん中に小さく楽譜が見えますが、さらに手の込んだことに(!)、この右側に紫外線を当てると彼の作品『母に捧げるソナタ』の自筆の楽譜が大きく浮かび上がってきます。もっともこの事実はパラグアイ人でも知っている人は少なそうで、後述のアグスティン・ピオ・バリオス音楽記念館の説明員も、筆者のトリビアに類する蘊蓄に大変驚いていました。

ところで、この「マンガレ」という名前は伝説上のグアラニ族酋長の名前ですが、先の通貨単位「グアラニ」ともども、グアラニ族との混血を国のアイデンティティーと捉えるパラグアイ人独特の意識を物語っており、また彼自身が、パラグアイの伝統的な民族衣装を纏った舞台写真も残されています。

彼は幼少時からギター演奏に秀で、自ら作詞作曲を手がけバロック様式の色調の濃い『大聖堂』はじめ多くの楽曲を世に送り出しました。活動範囲も広範で、頻繁に海外公演に出かけて南米諸国、アメリカ、ヨーロッパでの演奏活動を通じて名声を博し、惜しくも59才でエルサルバドルで客死しました。彼こそパラグアイが生んだ世界的な音楽家と言えるでしょう。

今年2015年は彼の生誕130周年。これを記念して去る6月22日、市内のアグスティン・ピオ・バリオス音楽記念館の正門に彼の胸像が置かれ、その除幕式が行なわれました。（蛇足ですが、この建物は1957年から73年まで、日本大使公邸に使われていました。）



（本年6月22日“マンゴレ”音楽記念館正門での胸像除幕式）



（胸像設置前の音楽記念館。この建物は一時期、日本大使公邸に使われていました）

この翌日には生誕地でもギターを持った立像の除幕式が行われましたが、これと同じ像がこれに先立ち、彼がこよなく愛していたドミニカ共和国でも建てられています。彼の墓は終焉の地エルサルバドルにあり、その国の国定文化遺産として登録されています。もし棺がパラグアイに戻ってくれば英雄廟に祀られることは間違いありません。



（翌6月23日生誕地での立像除幕式）

【4】終わりに

最後に、彼の楽曲の演奏では世界一と米国でも高く評価されている著名なパラグアイ人ギタリストを紹介します。その人はベルタ・ロハス、1966年パラグアイ生まれで、精力的な演奏活動で北米を中心に欧州でも公演旅行を重ねており、日本にも何度も来訪して演奏会を開催しています。彼女はパラグアイ観光大使や音楽芸術大使にも任命されており、この5月21日には議会から“芸術マエストロ”の称号を授与されています。



(本年5月、『日本パラグアイ人造りセンター』での公演)



(ベルタ・ロハスを囲むアルパ奏者ルシア塩満と
筆者夫妻)

外部からは文化的活動と無縁に見えるパラグアイ社会ですが、伝統的に芸術が盛んで、とくに近年の経済発展もあって、随所で文化施設や歴史的建造物の修復が進んでいます。また冬場には(4月～8月)各種のコンサートやオペラが順次開催されるなど、賑やかな夕べが続いています。ただ、こうした活動はもっぱら公費やスポンサー提供で実施されており、観客を動員して商業的に運営できるほどには市場が成熟していないのが現状ですが、その反面、どこか常にホームコンサートのような暖かい雰囲気漂っているようにも感じられます。

(上田善久 大使館 2015年7月)